

「褻のあわいに深く入り込んでいって…」と題する本稿も、今回で—12の回を数えることとなる。そもそも、筆者としては、本稿を二部あるいは二段構成として構想していた。対して、編集者曰く、それは本コラムの趣旨にそぐわぬ! — ということ、(1)、(2)、(3)…と現行のいわば連番構成をとることとなった次第。さて、十二といえば十二支 — その蘊蓄披露はさておくも、あるひとつのまとまりをなすわけだ。そこで、おもうところの第一部なり段なりの区切り、そして、つぎなる(13)へのいわば継なぎとして、これまでの論述の概括をしておきたい。

幾度となく繰り返してきたように、「同じであること」——このテーマを軸として、いくつかの事象や論点をそこに絡め、問題として展開してきた。すくなくとも筆者としてはそのつもり…。

まずは、山田風太郎『姫君何処におらすか』(『売色使徒行伝』所収)における隠れキリシタンの、とある一婦人のことば——「私どもは、みなあなた様とおなじ心でございます」。他方、「あなた様」と呼ばれるフランス人宣教師プティジャンはやがてローマに書き送る、「御主さまのおんいけにえも、十二使徒も、御復活も、なにもかもめっちゃめっちゃです」。この「おなじ」と「めっちゃめっちゃ」——その対立と昇華のうちに「同じであること」は「褻のあわい」として現成する。ここを火口として本稿は展開けられてきた…。

ここに大衆文学の荒唐無稽ではなく、中沢新一は、神話論理の規則のひとつ——「反転」をみた、しかも大衆文学ならではのそれ。反転——たしかに「反」(反対物、対立物)に「転」ずるわけである。しかしこの転は「お影さま」こと聖母マリアのカニバリズム(異端)から「ザヴィエルさまの御遺物…この聖なる腸の一片は、今私に新たな力をふきこんでくれました」(正統)へのものでもあった。隠れキリシタン(異端)のカニバリズムに仰天する宣教師プティジャン(正統)は、腸の一片をいわばプネウマとする輩(?)でもあるというわけだ。「正統」のヴェールのもとに封じ込められてきた、そもそも神話それ自体に内在するはずの、しかし秘められ続けてきたメタモルフォーゼがここに蘇生し、テーマ「同じであること」はハイヌウエレ型神話へと通底する。この神話が食物起源をその意味とすることは、大宜津比売神や保食神がその一類型であることから明白ではあるが、吉田敦彦はさらなる起源を示唆する——「この話はさらに、文化の起源、そしてまた人間の起源と、世界そのものの起源まで説明した」。

宗教学の胚胎期、諸学説が簇生した——たとえばアニミズム、トーテミズム、マナイズム、...etc. これら諸説のいずれもがある意図をもって案出され、事実、そのモデルの実態をほとんど反映するものでなかった。その後の人類学的アプローチの証するところだ。その詳細については端折らざるをえないが、起源の探求はそのまま本質解明の最捷徑であるとおもひゆえのことではなかったか。その轍は、また、言語学のものでもあった。そして、神話学のものでも…、だから、神話の語る起源は起源ならぬもの語っているのだ、唯一可能な隘路としての起源

の語りを介して。それとして語りえぬものを唯一可能な隘路としての起源の語りとしてかろうじて語りえている神話——それをローマン・ヤコブソンの音韻論を介して問い質すのがレヴィー・ストロースであった。音韻論についても、ここではおこう。替わって紹介したのが、ウエンディ・ドニジャーの次のことばである。

神話はすべて、自然が与える混沌たる事実^{事実}に知的意味を与えようとする弁証法の試みである…、またこの試みは不可避免的に人間の想像力を二項対立の網にとらえてしまう。

「混沌たる…」とは、自然が解決不能なパラドクスであるからにはほかならない。しかし、その不可能の可能をあえて問う、問わざるをえない——それが神話だ、さらに人間そのものというのであろう。この事態を、ドニジャーは『白鯨』のモービー・ディックとエイハブ船長に喩え、また、サマーセット・モームは両者の関係をメルビルその人に比す。下図はこの間の消息を表す。

天賦の才 (+) / 悪霊 (-)

すばらしい花 (+) / 枯らして (-)

近づくまい (+) / 本能 (-)

友情 (+) / 空なるもの (-)

やさしい (+) / 白眼視 (-)

(本来、1~3段のように各段の(-)はその下段の(+)^{下段}と重なる)

記号論的な構造(+/-)が横列状にも縦列状にも構制をなしている。その意味は次にある。神話のモデルによって作られていた「物語」に代わる最初の小説が登場したのはルネサンスと十七世紀、その直後、ある音楽形式が現れ、神話が放棄しかけていた機能を引き継ごうとしたように見える——レヴィー・ストロースはそう考える。『神話と意味』第五講で、ワグナーの四部作『ニーベルングの指輪』を素材に論証する——神話はオーケストラの総譜と同じような読み方をしなければならない、たとえば任意の頁をとりあげてみるとその一段一段ではなく頁全体を把握しないとイケない。

つまり、左から右へ読むだけではなくて、同時に垂直に、上から下にも読まねばならないのです。

記号論的な構造(+/-)が横列状にも縦列状にも構制をなす上図の意図はここに存する。

また、『神話と意味』第三講は「逆子—兎唇—双生児」という、「インディアン」神話によく登場する三項に、いわば神業にも等しく、同様の消息を読み解いていく。

その知的雰囲気あるいは状況に通底するものの否定しようのないルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインについていわれることがある——その営為は孤島の汀を辿っているようにもみえながら、その実、無限の大洋のかたちならぬかたちをなぞっているのだ、と。ドニジャーの言にしたがえば、レヴィー・ストロースについても同様の理解が求められる。ことばをくり返せば、神業のごときその異文解析——その精緻が極まれば窮まるほど、その無限の彼方に鉛垂するところ、「自然の与える混沌」が屹立して控えている、にもかかわらず「知的意味を与えようとする弁証法の試み」が人間として…。本稿の題する、「褻のあわいに深く入り込んでいって…」も、また、そこを志向して…。